

文学博士小島憲之君の「上代日本文学と中国文学」に対す

授賞審査要旨

小島憲之君著「上代日本文学と中国文学」は「出典語を中心とする比較文学的考察」と副題してあるように、出典語の方面から中国文学が上代日本文学にどのように影響したかを考察している。上巻は序説、第一篇漢籍の伝来、第二篇古事記の述作、第三篇日本書紀の述作、第四篇風土記の述作よりなり、中巻は第五篇、万葉集の表現よりなっている。下巻は近く刊行される予定である。序説において上代文学の範囲を文学（或いは文学的なるもの）の発生以後、文学意識の目ざめによつて生まれた漢字による文学的表現やその作品の誕生をみる頃までの文学をさし、時代の点より言えば文字をもたなかつた時代を経て四世紀の後半、異国文学を迎え入れ、漸次、大和の国に華やかな混淆文化を形成し、九世紀初葉、平安初期における漢風謳歌時代へつらなる時代の文学を称するとしている。そうして上代文学の研究において比較文学的研究は重要な方法の一であるとし、特に出典語を挙げてその意義や方法を説き、更に上代文学研究の展望を行なっている。

第一篇では漢籍の伝来を扱っている。まず伝来以前の口頭伝承の文学における人称表現の問題をとりあげ、第三人称的表現が第一人称的になつてゆく現象があることを記紀の歌謡によつて説いたり、第一人称と第二人称の混乱した例などを挙げている。また伝承文学の中に次第に「文」（文学的なるもの）が芽生えることを説いている。典籍の伝来については中国の典籍の伝来の経過と伝来書の推定を行なっているが、外証による伝来書の推定とともに、内証に

よる推定の方法を説いている。特に伝来書の中に詩経や文選等の典籍の外に、類書の伝来を精細に考察し、それらの類書の中に今も残るものとして芸文類聚や北堂書鈔、初学記を挙げ日本書紀等の出典にも芸文類聚等からとつたものが多いことを考証している。

第二篇、古事記の述作においては古事記の伝承的要素を中心としてその性格を扱い、古事記と中国文学との関係のべ、古事記上表文をはじめ中国文学からの出典と見るべき箇所を挙げてゐる。更に古事記の文学性についてはその文章の漢訳仏典的文体や口承的文体を考察し、古事記の台本の問題を扱つてゐる。即ち稗田阿礼の誦習をば記録による誦習と見るべきであり、阿礼の誦習の際には未公表の台本の成立されていたとしている。

第三篇、日本書紀の述作においては第一にその書名を考察して日本紀と日本書紀との両者が奈良時代から行なわれたとし中国の典籍の書名の出典などの上からも一方だけに定め難いとして、日本書紀は述作物としての書名であり、日本紀は一般の称呼であるとしている。つぎに日本書紀の注について諸家の説を検討し、述作過程において新古の注の別があつたにしても、これは養老四年奏上以前のものであり、これらを含めて注のあるものを奏上したものと見られるとしている。更に中国史書や文選、仏典等からの出典を考察しているが、中国史書では史記よりも漢書(顔師古注)を多く引用していることを考証し、後漢書や三国志、梁書、隋書等も引用されたとする。また文選や金光明最勝王經等の漢訳仏典からの出典を指摘しているが、類書特に初唐の欧陽詢等の撰する一大類書である芸文類聚による出典が多いことを明らかにし、一々例を挙げて考証している。

日本書紀の文章については漢籍の語句を借用した潤色の著しい巻と然らざる巻のあることを指摘し、神代紀、神武

紀、綏靖紀より安康紀まで、雄略紀より崇峻紀まで、推古紀より持統紀までの五にわけて考察しており、神代紀の文章は中国の俗語をもつて書かれている跡がかなり見えるが、他の諸巻に比して全体よりみて一般に統一であるとしている。更に訓詁を通じて見た日本書紀の表現を扱い、上代歌謡をめぐる中国文学との交渉については上代の歌謡における歌と「ふり」（振）との名称の命名法は中国の玉台新詠等に見られる歌辞のそれによる部分のあることを説いている。上代歌謡にある童謡も漢書、後漢書などの五行志の述作の仕方による所が大であつたとしている。

第四篇、風土記の述作においては風土記という書名は中国の旧唐書經籍志にある風土記十卷（周尪撰）の名によつたとする岡田正之氏の説を敷衍するとともに、更に中国の文献の影響の上から風土記の成立を扱い、諸国風土記やその逸文について出典や文章を扱っている。たとえば常陸風土記の構成は漢書地理志の構成に類似することを指摘し、潤色においても文選等との類似を挙げている。

中巻第五篇、万葉集の表現では「口頭より記載へ」「万葉集名義考」「万葉集の三分類」「万葉集の文字表現」「万葉集と中国文学との交流」「山上憶良の述作」「遊仙窟の投げた影」「伝説の表現」「七夕をめぐる詩と歌」「天平期における万葉集の詩」の各章にわけて出典を中心として万葉集と中国文学との関係を考察している。いずれも精緻な研究であるが、たとえば万葉集名義考では諸家の説や中国の出典を検討するとともに、万葉の語義だけでは名義の解決はつかないとし、編纂事情、成立過程、歌集としての性格などを合わせ考えると、万世、万代の意と見るべきであるとしている。また「万葉集の文字表現」では万葉集の歌がすべて漢字で書かれてあるので一々文字をとりあげて中国文学における用法と比較し、その影響してゆく過程を実証的に扱っている。万葉における「もみじ」は多く「黄葉」と

書かれてあるが、著者は六朝より初唐までの詩を見ても紅葉の例はあまり多くなく、大部分は黄葉であることを指摘して黄葉の用法も中国文学の文字の影響であるとしているのもその一例である。漢学の影響の多い憶良の述作の考察にも新見解が多く憶良の編したと伝える類聚歌林も芸文類聚等の影響をうけていると指摘しているのもそれである。

「伝説の表現」においては中国文学との関係を見る場合に漢字という文字による表現はその裝飾性潤色性のために、単に詩句の類似もしくは説話の一部の類似だけでなく全体の上から扱うべきであるとし、柘枝伝説、浦島伝説を例として考察を行なっている。

全体として出典語の方面から上代日本文学と中国文学との関係を明らかにしようとする意図はよく達成されておる。もとより中国の典籍から出典をとりあげる場合に異論のある点もないではないが、これはやむを得ないことであり、中国文学の極めて多くの文献を渉猟して出典語を明らかにした著者の労苦は多大である。殊に原典からの出典とともに中国における類書から引用された出典語が多く存することを精細な考証により明らかにした如き、卓抜なる見解と言うべきである。近時比較文学的研究は学界の有力なる動向となり、幾多の成果が現われているが、本書はその中でもすぐれた業績であると認められる。